

青梅市文化財ニュース

第317号

平成26年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

青梅市におけるトウキョウサンショウウオの盛衰

サンショウウオはカエルやイモリと同じ両生類の仲間です。有名なオオサンショウウオは別の科で、小型のサンショウウオ科は日本に3属23種が生息します。青梅市には、このうちトウキョウサンショウウオが丘陵部に、ヒダサンショウウオが御岳山や高水山の山地にと2種が分布します。

トウキョウサンショウウオは、西多摩郡多西村（現・あきる野市草花）で最初に発見されたことから「トウキョウ」と名付けられた種です。小型サンショウウオは日本列島の地殻変動や地形変化の歴史の中で生息域が分断され、多くの種に分かれてきました。トウキョウサンショウウオが属するカスミサンショウウオ群も、いくつもの種に分化しました。トウキョウサンショウウオの分布圏は、福島県の一部を含みますが、主に関東地方の1都5県で、標高300m以下の丘陵地帯に生息します。

その基準産地が東京都であり、「東京都のトウキョウサンショウウオ地域個体群」は減少傾向にあることから、環境省のレッドデータブックでは「地域的に孤立しており、絶滅の怖れが高い保護に留意すべき個体群」とされてきました。2006年の改訂では、種自体が「絶滅危惧Ⅱ類」にランクされました。東京都版レッドリスト（2010）では、西多摩地区は「絶滅危惧ⅠB類」とされています。日の出町では町の天然記念物に指定しています。

東京都におけるトウキョウサンショウウオの分布の全体像が明らかになったのは、八王子市の中学校教諭であった金井郁夫氏による調査結果が、環境庁（当時）の「第2回自然環境保全基礎調査・動物調査報告」（1979）に報告されたのが最初です。トウキョウサンショウウオの成体は陸上で生活しますが、人目に触れることはほとんどありません。早春になると、水田跡や池などの水溜りに産卵に集まって来ます。1頭のメスは1対のバナナ状の卵囊を水中に産みます。この時が調査のチャンスで、産卵場所を確認することで生息域が分かります。また、卵囊の数は個体群の規模を推定する足がかりになります。その後、1998年にトウキョウサンショウウオ・ネットワークによる東京都全域調査が行われました。20年近くの間にかかなりの生息地（産卵場所）が失われていました。10年後に再度調査をしようと約束し、2008年にトウキョウサンショウウオ研究会により再び東京都全域調査が行われました。

この調査結果が、先日ようやく、「トウキョウサンショウウオ この10年間の変遷」という報告書として発行されました。本稿はこの紹介です。

青梅市のトウキョウサンショウウオは、市内北東部の加治丘陵と南東部の草花丘陵の二つの分布圏があります。加治丘陵では、霞川・黒沢川・成木川流域の山裾の水田跡地や池などが産卵場となっていて、以下の地区から64地点の産卵場と934個の卵囊が確認されました。

●霞川流域 今井1丁目、木野下2丁目、塩船

●黒沢川流域 富岡 1～3 丁目、小曾木 1～5 丁目、黒沢 1 丁目

●成木川流域 成木 1～4 丁目

草花丘陵では、大荷田川流域と吉野街道南側等の山裾の水田跡地や池などが産卵場となっていて、以下の地区から 29 地点の産卵場と 371 個の卵囊が確認されました。

友田町 1 丁目、5 丁目、長淵 2 丁目、5 丁目、8 丁目、駒木町 2 丁目、
畑中 1 丁目、3 丁目

1998 年調査で卵囊が確認された地点は、10 年後にどうなっていたでしょうか。

北部個体群（加治丘陵）では、1998 年調査で卵囊を確認した 13 地点のうち、絶滅が 3 地点、減少し絶滅危惧が 3 地点、前回と同様が 7 地点です。南部個体群（草花丘陵）では、1998 年調査で卵囊を確認した 29 地点のうち、絶滅が 7 地点、減少し絶滅危惧が 16 地点、前回と同様が 6 地点でした。トウキョウサンショウウオ成体の行動半径は産卵場からせいぜい 200m 位までといわれるので、絶滅地点が増えると一層孤立個体群が増え、地域個体群の衰退が危惧されます。

絶滅や減少の著しい地点の原因は、水田跡地の乾燥化が最も大きな要因です。また、近年増加している外来種のアライグマにより成体や卵囊が食べられているのも無視できない要因になっています。青梅市の水田は 1970 年までは徐々に減る傾向でしたが、1970 年代の 10 年間に半分に減り、さらにその後の 20 年でその半分に減っています。2000 年の水田面積は 1970 年の 4 分の 1 です。1970 年代に耕作放棄された水田や用水跡地は、しばらくは湿地状態が保たれトウキョウサンショウウオの格好の繁殖地となりましたが、歳月の経過とともに用水路の底が削られて深くなり、また水田の畦畔が崩れて水田面に水が溜まらない状態になりました。乾燥化が進むとともにトウキョウサンショウウオの産卵・繁殖場の機能の喪失が各地で進行しています。

トウキョウサンショウウオは、メスが性成熟し繁殖に参加するのは 5 歳から、寿命は約 15 年といわれます。卵囊数が減少しているのは、毎年産卵に訪れる親個体が少しずつ減少し、次世代は育っていない可能性が高く、個体群として縮小再生産の衰退の危機にあると考えられます。何年か後には、親個体の死滅に伴って卵囊も見られなくなり生息地が消滅してしまうことが危惧されます。

保護対策として、乾燥化が進んだ場所では、浚渫により水溜りを造り産卵場と孵化した幼生が育つ環境を整備することが考えられます。親個体が残っているうちに行えば、復活は可能でしょう。場所によってはアライグマ対策も必要です。

本稿の執筆にあたり、青梅自然誌研究グループの御手洗望氏から資料提供と助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

（文責 久保田繁男）